

受難節第3主日礼拝説教 「ついて行きたい！」

日本基督教団石神井教会 2019年3月24日

【旧約聖書日課】イザヤ書 63章7～14節

- 7 わたしは心に留める、主の慈しみと主の栄誉を
主がわたしたちに賜ったすべてのことを
主がイスラエルの家に賜った多くの恵み、憐れみと豊かな慈しみを。
- 8 主は言われた、彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と。
そして主は彼らの救い主となられた。
- 9 彼らの苦難を常に御自分の苦難とし、御前に仕える御使いによって彼らを救い
愛と憐れみをもって彼らを贖い、昔から常に、彼らを負い、彼らを担ってくださった。
- 10 しかし、彼らは背き、主の聖なる霊を苦しめた。
主はひるがえって敵となり、戦いを挑まれた。
- 11 そのとき、主の民は思い起こした、昔の日々を、モーセを。
どこにおられるのか、その群れを飼う者を海から導き出された方は。
どこにおられるのか、聖なる霊を彼のうちにおかれた方は。
- 12 主は輝く御腕をモーセの右に伴わせ、民の前で海を二つに分け、
とこしえの名声を得られた。
- 13 主は彼らを導いて淵の中を通らせられたが
彼らは荒野を行く馬のように、つまずくこともなかった。
- 14 谷間に下りて行く家畜のように、主の霊は彼らを憩わせられた。
このようにあなたは御自分の民を導き、輝く名声を得られた。

【使徒書日課】テモテへの手紙二 2章8～13節

8 イエス・キリストのことを思い起こさない。わたしの宣べ伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫で、死者の中から復活されたのです。9 この福音のためにわたしは苦しみを受け、ついに犯罪人のように鎖につながれています。しかし、神の言葉はつながれていません。10 だから、わたしは、選ばれた人々のために、あらゆることを耐え忍んでいます。彼らもキリスト・イエスによる救いを永遠の栄光と共に得るためです。11 次の言葉は真実です。

- 「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる。」
- 12 耐え忍ぶなら、キリストと共に支配するようになる。
キリストを否むなら、キリストもわたしたちを否まれる。
- 13 わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる。
キリストは御自身を否むことができないからである。」

【福音書日課】ルカによる福音書 9章18～27節

18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。19 弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」20 イエスが言われた。「それでは、あなたもわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」

21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」23 それから、イエスは皆に言われた。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。²⁴自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。²⁵人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。²⁶わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。²⁷確かに言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」

主イエスの祈りが聴こえるところで

《18歳の祝福》の案内に、いったい何人が応えて集まってくれるだろうかと思ひながら、今日を迎えました。教会学校（こどもの教会）で共に歩いて来てくれた若い皆さんが、18歳までは何とかつながつていることができているのに、それを過ぎると教会とのかかわりが切れてしまうことが多いのです。18歳か19歳で進学をし、あるいは就職をする場合などでもそうでしょうが、今までとは比べ物にならないほど広い世界での生活が始まります。家族のいる自宅にも、居ることが急に少なくなるでしょう。ましてや、教会に通うことが激減してしまっても仕方ない。そう、わたしたちは言い訳をしてきました。それならば一層のこと、18歳の皆さんを「教会卒業おめでとう」とお祝いしてあげたらよい、と考えて《18歳の祝福》をすることになった、というわけではありません。わたしたちは、その皆さんに、わたしたちの仲間入りをしてほしいと願っているのです。

もちろん、いきなり18歳の皆さんに洗礼を受けて信者になりましょう、と勧めるわけではありません。だれがいつ洗礼を受けるかは、神だけがご存じのことです。受けることになる人もあるでしょうし、受けないまま一生を終わる人もいます。わたしたちは、皆が洗礼を受けるようになることを願いますが、一人ひとりに対しては神のご計画がそれぞれにあるのです。

そうだとすると、18歳の皆さんには、こぞって「祈りの交わり」へ仲間入りしてほしいのです。それは、熱心に礼拝するというような意味ではありません。自分のために祈ってくれている人がいることを知り、自分も誰かのために祈るようになる。そういう「祈りの交わり」に加わってほしいのです。

福音書日課（ルカ9章）のはじめで、弟子たちは、主イエスが一人で祈っているらしやる傍らに共にいた、と描かれていました。何気ない描写ですが、これは、礼拝にあずかるわたしたちの根源的な姿を描いているのです。弟子たちは祈っていませんが、主イエスの祈りの響きの中に置かれているのです。弟子たちが熱心に祈ったから、主イエスの御声が聴こえてくる、というわけではありません。弟子たちは、ただそこにいて、主イエスの祈りを耳にしているのです。

なぜ、このような様子が描かれ、伝えられているのでしょうか。このことを伝えたのは、当の弟子たちです。弟子たちは、自分たちが祈ることも祈りの言葉も知らずにいたときにも（11章で、弟子たちは主イエスに祈りの言葉を教えてもらっています）、主イエスが祈ってくださっていたことを伝えたかったのでしょうか。何もわからずに傍らにいた自分たち弟子のためにこそ、主イエスが祈ってくださっていたのだと気づいた、そのことを伝えたかったのではないのでしょうか。

「あなたは何者か？」

教会で礼拝にあずかるとき、わたしたちは、主イエスの祈りの響きの中に身を置こうとしています。聖書の御言葉の朗読を聞き、自分の言葉ではなく教会が受け継いできた言葉で祈り、讃美を歌うことを通して、主イエスの祈りの響き、御声の響きを、聴き取ろうとしています。わたしたち自身の言葉が退き、静まらなければ、目に見えない主イエスの祈りの響きは、聴こえてきません。それは、わたしたちには難しいことですが、礼拝の営みの内に身を置くことの中で、聴こえてくる瞬間があることをわたしたちは知っているのです。主イエスの祈りの響き、御声の響きに、気づかされる経験を、わたしたちはするのです。

わたしたちは、成長して大人になれば、自分のために親や家族が祈ってくれていたことに気づかされるようになります。思春期の反抗期を越えれば、たいていは、今までの自分がそのような祈りに包まれていたことに気づくようになるのです。もちろん、そのような関係を親や家族との間に持てない場合がないわけではありません。自分のために祈ってくれるような親や家族がいないという境遇の人もいます。祈ってくれている親や家族はいたはずなのに、いつまで経ってもそのことに気づくことができない人もあるでしょう。そうであればこそなおさら、自分のために祈ってくれている親や家族という存在があることに気づかされるようになるというのは、その人の人生にとって大きな意味を持つことでしょう。そのとき、その人は、自分のために祈ってくれていた親や家族が、自分にとって何者なのかということ、新しく知るようになるからです。そして、そのときから、その人は、自分は何者なのかということも問い直され、今度は自分の家族や子のために祈る生き方を始めることができるようになるのです。

主イエスが祈ってくださっている中に、自分は置いていただいている。そのことに気づくことは、主イエスとの関係を新しく知るようになる始まりです。

主イエスは、どのようなお方か。「**群衆は、わたしのことを何者だと言っているか**」と、主イエスは弟子たちにお尋ねになりました。人は、主イエスのことをいろいろと説明してくれます。教会でも、わたしたちは、子どもたちや若い皆さんに、「主イエスは、こういうお方」という話をします。けれども、それは、その人と主イエスとの関係を語っているのにすぎません。人と人の関係は、他の人がどう考えるかということと同じではないのです。主イエスは、ですから弟子たちに問われます、「**あなたがたはわたしを何者だと言うのか**」と。

そのとき、一番弟子のペトロは答えました、「**神からのメシアです**」。良い答えでしょう。聖書科のテストだったら、合格点でしょう。でも、このとき、そう答えたペトロに対して、主イエスは、良いとも悪いともおっしゃられませんでした（マタイ福音書では、ペトロが誉められたような主イエスの言葉が続いています）。それでも、ペトロはこのとき、一歩、主イエスに近づいたのではないのでしょうか、「自分のために祈ってくれているこのお方は、いったいどなたなのだろうか。自分にとってどんな存在なのだろうか」と。そして、その問いはまた、「あなたは何者なのか」と、ペトロ自身にも返ってきたのではないのでしょうか。

恥ずかしくない！

わたしたちは教会で、若い皆さんや子どもたちのために祈ります。「祈らないでくれ」と言われても、「祈られても迷惑だ」と言われても、祈るでしょう。人のために祈るといのは、そういうことです。祈らずにいられないので、祈るのです。しかし、それは、見返りを求めてのことではありません。相手構わず勝手に祈り続けるのは、見返りを期待していないからです。

自分に「祈り」を返してほしいければ、わたしたちは、それを期待できそうな人に向けて祈り、そのことを伝えます。わたしたちは信者同士でしばしば、「お祈りください」と願い合い、また、「祈っています」と言葉を添えます。社交辞令ではなく、わたしたちは互いに祈り合う関係を築いているのです。そうだとすても、わたしたちは、そのような「祈りの交わり」の中に閉じこもっているわけではないのです。そのような相互に祈り合う「祈りの交わり」を越えて、まだその外にいる人のために、一方的に祈ることもするのです。見返りを求めず、ただ、その人もまた祈る人になってほしいと願いながら、一方的に祈りに憶えることがあるのです。

それを、わたしたちは、子や家族や親しい友のためになれば、無意識のうちにしているかもしれません。それを、教会の営みの中で、わたしたちは、さらに広げて、誰に対しても、すべての人のために祈るようになることを目指しているのです。分け隔てなく、すべての人のために祈る。しかも、見返りを求めずに一方的に。

それは、簡単なことではないと思います。応えてくれるか分からない相手のことを祈りに憶え続けるのは、しんどいものです。敵意や悪意をもって向かってくる相手のために祈るといのは、容易な事ではありません。それを真剣に、真摯に貫こうとしたら、どうなるのか。主イエスは、そのような者は「必ず多くの苦しみを受け…排斥されて殺され」とおっしゃられました。人のために祈ること、敵のために祈ること、それは、命がけのことなのだ、主イエスは、言葉で言わただけでなく、事実ご生涯をかけてお示しになられたのです。

主イエスがひとり祈られている傍らに、共に居させていただいていた弟子たちは、その主イエスの祈りに気づかされていきました。そして、自分たちのために一方的に祈ってくださっていた主イエスの祈りを、いつしか、自分たちも祈り始めたのです。それが、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」との招きにお応えすることであったのです。

わたしたちは、この主イエスというお方を恥じません。主イエスの言葉を恥とは思いません。それは、世渡り上手にさせる言葉ではないかもしれませんが、わたしたちを生かす言葉なのです。すべての者を共に生かす生き方なのです。それは、主イエスの祈りから、始まりました。わたしたちを包む主イエスの響きに耳を傾けましょう。自分の言葉を退け、静まって主イエスの祈りの響きを聴き取る時、わたしたちの口からも、同じ祈りの言葉が響き始めるのです。